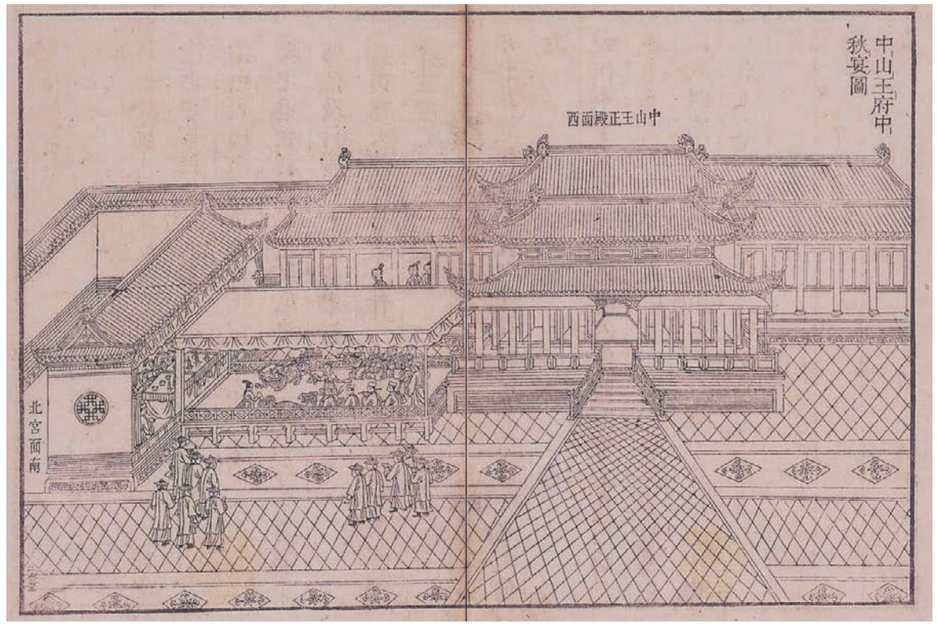
300年前の組踊の雰囲気を味わおう



琉球王朝時代、冊封使歓待の「組踊」の様子

中山伝信録巻第2
沖縄県立図書館所蔵　CCBY4.0

初演からの300年

300年間、脈々と受け継がれてきた沖縄の伝統芸能「組踊」。組踊は琉球王朝時代、中国皇帝の使者、冊封使一行をもてなす芸能として、1719年、踊奉行の玉城朝薫によって創作された琉球独自の歌舞劇です。今年で、初演から300年の節目を迎え、去る5月には、玉城知事が会長を務める組踊上演300周年記念事業実行委員会による開幕式典が、国立劇場おきなわにて行われ、県内外において組踊の上演が盛んに相次いでいます。しかしながら、初めて上演された300年前から、今も変わらずに、ずっと同じスタイルで演じられているのかと問われると、決してそうではないのです。

宮廷芸能として育まれてきた組踊は、廃藩置県以降、苦難の道筋を乗り越え、今日まで継承されてきました。禄を失った、当時の士族たちは、宮廷内で演じてきた組踊をはじめとする古典芸能を、庶民を対象に木戸銭をとって演じることになりました。組踊は冊封使歓待の際に演じられた環境と異なり、芝居小屋の舞台で演じられることになりました。王朝時代、冊封使歓待の際に演じられた舞台は、首里城正殿の御庭、北殿前に仮設舞台、それに橋掛かり（能楽師が登場する幕から本舞台へとつながる長い廊下のこと。）をつけたスタイル。能舞台に近いかたちで、演じられていたのです。それが廃藩置県以降は、芝居小屋の舞台、プロセニアム形式（額縁舞台）で上演されることになったことから、これまでの空間と異なり、新たな演出が用いられた流れで、今日まで継承されてきました。

当時の組踊は？

上演300年の節目にあたり、実際300年前は、どのようなスタイルで演じられていたのか、気になるところでしょう。組踊は台本を備えていることが基本となっていますが、台本上には、台詞や歌詞のみが記載され、ト書き（演者の所作や動き）はほとんど記されていないのです。文献資料等を紐解き、当時の形態を再現したいと思うも、去る沖縄戦で、芸能に関する資料が消失し、ほとんど存在しないというのが残念なところです。しかしそれでも節目の年に、なんとか少しでも初演当時のスタイルに沿った舞台を再現する取り組みが、実は今、国立劇場おきなわで進められています。

現在、組踊の舞台では、背景に紅型幕が設置され、その前で演じられるのが定番のスタイルですが、300年前は、舞台後方に幕は何も張られていなかったのです。北殿から舞台を眺める冊封使にとって、仮設舞台で演じる組踊の奥には、南殿が見えていたでしょう。

また、音楽の楽器構成ですが、三線・箏（こと）・笛・胡弓・太鼓の五つの楽器を用いて演奏されていますが、当時はなんと、小鼓も用いられていました。組踊は、大和芸能など様々な影響を受けて創作されたといわれますが、まさに能のお囃子に用いられる鼓が、組踊の世界に組み込まれ演奏されると、現在演じられている組踊とは、また違った印象を受けることになるでしょう。

そしてまた、冊封使歓待の宴席では、様々な歌舞音曲、芸能のほかにも、おもてなしの精神で仕込まれた出し物が存在しました。御冠船芸能の終盤に、からくり花火が披露されたのです。

謎につつまれた300年前の舞台形式。しかし、形体は変わっても、琉球王朝の誇りと意地をかけ、独自の宮廷芸能として、多くの先人たちの手によって、今日まで継承されてきました。舞台芸能として演じられるスタイル、また各地域の民俗芸能として豊年祭などの場で受け継がれてきたスタイル、様々な組踊の舞台から、多くのことが伝わってきます。300年の中で変わってきたもの、変わらないもの、そしてこれからどのように変化し、何をどう守っていくのか、組踊の歴史は、まだまだ始まったばかりです。

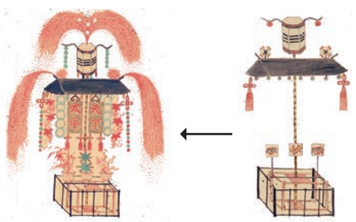
組踊「執心鐘入」

組踊復元公演

組踊の魅力や意味を改めて捉え直すことを目的に、10月4日（金）と5日（土）に国立劇場おきなわの組踊公園（野外）で当時の仮設舞台を復元し、御冠船踊と組踊の研究公演を開催いたします。その際には、からくり花火の再現にも取り組む予定です。

また、11月2日（土）、3日（日）には、首里城の御庭で、組踊の復元公演を開催いたします。

仮設舞台での組踊復元公演を鑑賞できるのは、滅多にない貴重な機会です。ぜひ、会場にお越しいただき、当時の琉球王朝に想いを馳せながら鑑賞してみるのはいかがでしょうか。



からくり花火

那覇市歴史博物館提供

問い合わせ　文化振興課　電話：098-866-2768　FAX：098-866-2122